

令和 5 年 5 月 26 日現在

機関番号：12601

研究種目：若手研究

研究期間：2019～2022

課題番号：19K13087

研究課題名（和文）明末清初における官刻・家刻・坊刻それぞれの実態の研究

研究課題名（英文）A study on the realities of Government publication, private publication, and commercial publication in the late Ming and early Qing dynasties

研究代表者

上原 究一（UEHARA, Kyuichi）

東京大学・東洋文化研究所・准教授

研究者番号：30757802

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 4,800,000円

研究成果の概要（和文）：新型コロナウイルスの流行により海外への出張調査が不可能となってしまったため、計画の大幅な見直しを行い、既に手元に資料を多めに収集していた坊刻の実態に絞って研究を進めた。

2021年度までには、長らく所在不明だった阿英旧蔵の熊雲濱覆世徳堂刊本『西遊記』について紹介したり、明末の杭州の書坊容與堂の活動に関して新たな知見を得たり、過去の日本語論文を中国語訳して海外に成果を発信した。

2022年度には、2021年度後半に別の研究経費によって購入することが出来た、それまで存在自体が全く知られていなかった伍子胥を主人公とする明末の通俗小説刊本『新刻彙正十八國鬪寶傳』について初歩的な研究を行った。

研究成果の学術的意義や社会的意義

明末の坊刻、即ち商業出版の世界においては、通俗小説や戯曲が売れ筋のコンテンツの一角を占めていた。本研究においては、長らく行方不明になっていた阿英旧蔵の熊雲濱覆世徳堂刊本『西遊記』や作品自体が新発見の『新刻彙正十八國鬪寶傳』といった明末の坊刻で出版された小説刊本についての調査や、多くの小説・戯曲を出版していた杭州の容與堂の活動状況に関する研究を通じて、当時の商業出版界で売れ筋のコンテンツがどのように流通していたかの解明を進めることが出来た。特に、新発見の『新刻彙正十八國鬪寶傳』からは今後も多くの知見が得られる見込みである。

研究成果の概要（英文）： Since the outbreak of the new coronavirus made it impossible for us to travel overseas to conduct research, we made a major revision of our plan and focused our research on the actual situation in commercial publication, where we had already collected a relatively large amount of materials.

By FY2021, I introduced the long-lost Xiong Yunbin Edition "Journey to the West" in A Ying's former collection, gained new insights into the activities of the late-Ming dynasty Hangzhou Publisher Rongyutang, and translated my past Japanese papers into Chinese to disseminate findings overseas.

In FY2022, I conducted rudimentary research on a book of popular novels from the end of the Ming dynasty titled "Xinke Huizheng Shibaguo Doubao Zhuan" featuring Wu Zixu, the existence of which was not known at all until the latter half of FY2021, when I was able to purchase it with other research funds.

研究分野：中国古典文学・書誌学

キーワード：中国文学 書誌学 官刻・家刻・坊刻 覆刻・翻刻 書坊 十八国鬪宝伝 伍子胥

1. 研究開始当初の背景

前近代の中国における出版には、皇室や官署による公的な出版である官刻、士大夫の個人的な自費出版である家刻、書坊による商業出版である坊刻の三種があったとされる。ともすればこの三者は截然と区別出来るかのように考えられがちのだが、研究代表者が本研究計画を立てるまでに進めていた明末清初の坊刻の実態についての研究の中で、官刻と坊刻の境界線上にあるように思われる事例や、官刻と家刻のどちらに分類すべきか迷うような事例や、明らかに坊刻でありながら「官板」であることを標榜している事例や、果ては数代続いた書坊の後継者でもあり進士に及第した士大夫でもある人物が地方官時代に任地で刊行した刊本という三者のどれに分類すべきなのか悩ましい事例など、三者のうちのどれだとは単純には定め難い事例が少なからず見つかった。そのため、当時において三者がどの程度まで区分出来るものだったのか、どこまで相互に影響しあっていたのかという問題意識を持つに至った。

2. 研究の目的

そこで、本研究では前述のような官刻・家刻・坊刻の境界線上にあるような事例や、逆にそれぞれの典型例と認識されているような事例をなるべく多く集めて精査することによって、明末清初における官刻・家刻・坊刻それぞれの実態を把握し、それらが互いにどのように絡みあっていたのかを解明することを当初の目的としていた。単独で見ただけは様々な解釈が可能な事例であっても、複数の類似の事例を集めて考察することで解釈の余地を絞り込めると期待される。当時において坊刻と官刻との間にどの程度の関わりがあったのか、坊刻と家刻の境界はどの辺りに置けるのか、官刻なのか家刻なのか悩ましい事例が何故あるのかといった問題を整理することが出来れば、明末清初の出版業界の実態、ひいては前近代中国における出版文化への理解が一段と進むのみに止まらず、当時における官と民との関わりや、文人ネットワークの在り方などに関しても新たな視点を提供することが出来ると見込まれ、当時の文学・思想・社会の各方面の研究に益するところ大であると考えられる。

3. 研究の方法

官刻・家刻・坊刻の境界線上にあるような事例や、逆にそれぞれの典型例と認識されているような事例をなるべく多く集めて精査することによって、明末清初における官刻・家刻・坊刻それぞれの実態を把握し、それらが互いにどのように絡みあっていたのかを解明する。より具体的には、ある版本の刊記や序文からその刊行者として知れる人名や書坊名や官署名などが他の版本の刊記や序文や本文にも見えるかどうか、並びに見えるとしたらそれはどのような形なのかを幅広く調査して整理検討することが本研究においては重要な作業となる。

なお、明末清初の出版をめぐる先行研究では、かつて示された推測が確たる論証を経ないまま定説化してしまっている事例が間々あったり(笠井直美「北京大学図書館蔵『忠義水滸全傳』「万曆袁無涯原刊」情報の一人歩き」(『名古屋大学中国語学文学論集』21、2009年)参照)引用率の非常に高い工具書である杜信孚『明代版刻綜録』(江蘇広陵古籍刻印社、1983年)やその改訂版に当たる杜信孚・杜同書『全明分省分県刻書考』(線装書局、2001年)の記載が信頼のおけるものとは到底言えなかったり(上原究一「金陵書坊唐氏世徳堂主人考 二人の「唐光祿」」(『中国 社会と文化』27、2012年)参照)用例からは明らかに「(年号)年間のある年の刊行」という意味でしかない「新歳刊」が「元年の刊行」という意味であるとの誤解が広まっていたり(上原究一「自新齋系統について 建陽余氏刻書活動研究(2)」(『山梨大学国語・国文と国語教育』21、2016年)及び磯部彰「建陽本「萬曆新歳」刊記考」(『東北アジア研究』22、2018年)参照)するため、先行研究・工具書・既存の目録などの著録をそのまま鵜呑みにして机上で研究を進めると誤解に誤解を重ねてしまう可能性が高い。そのため、関連する版本は可能な限り原本を閲覧して、刊行者や刊年や刊行地についての情報を一定の基準の下に確認する作業が望まれる。

一方で、原本の調査だけでは収集出来る事例の数は限られてしまうので、信頼の置ける影印本や所蔵機関が公開している画像、更には研究代表者の所属する東京大学で利用契約をしている「中国基本古籍庫」のようなテキストデータと原本画像とを対照可能なデータベースの類も積極的に活用する。これらの利用によって得られた事例については、原本を確認せずとも疑義のないものとして扱えると判断された場合はそのまま使用し、原本を実見して確かめるべき場合には原本の出張調査を行うようにする。なお、調査対象とする明末清初に出版された漢籍の刊行者に関する情報を効率的に探し出すために、経史子集を網羅する大量の版本の影印画像を収録し、かつその全文のテキスト検索が可能な凱希メディアサービス社のソフトウェア「雕龍シリーズ 続修四庫全書」上下集(上集に2613種、下集に2600種の版本を収録)を平成31年度早々に購入した。更に、『中国古籍珍本叢刊 東北師範大学図書館巻』全90冊(国家図書館出版社、2017年)を始めとして、紙媒体の影印本も適宜購入して調査を進めた。

4. 研究成果

前述のように、本研究計画を予定通り遂行するためには、明末清初の出版物を数多く所蔵する国内各地や海外の図書館への出張調査を複数回行うことが必須であった。研究初年度には、まず影印本やデータベースで参照可能な事例を集めたり、出張せずに閲覧可能な原本を調査したり、本研究計画の開始前に日本の古書市場で新たに見つかった明末の坊刻本を紹介したりすることから手を付けた。その過程で原本確認の必要を感じた版本や、その範囲では調べられなかった版本を所蔵する図書館への出張調査をその年度末から研究2年目の夏休みにかけて何度か行うつもりでいた。ところが、2020年2月以降は新型コロナウイルスの流行によって、国内外を問わず出張調査が不可能な状況が長く続くことになってしまった。それどころか、研究代表者の居住している東京近郊の図書館でさえ調査が行えない時期もかなりの長さには及んだ。そこで、当初2年の予定だった研究期間を1年延長したが、出張調査が不可能な状況は全く改善されなかった。更に1年延長してみたものの、2022年度の夏休みにも海外での調査はまだ不可能な状況であった。そのため、この間に研究計画の大幅な見直しを行い、購入したデータベースや書籍は活用しつつ、出張なしで可能な範囲で研究を進めることにした。研究代表者は本研究計画の開始以前には主として坊刻について研究を進めていたため、手元に比較的多くの資料を収集済であった。その反面、官刻や家刻についてはあまり手掛けてこなかったため、質・量いずれの面においても出張調査なしでは十分な資料を揃えるのは難しかった。そこで、本研究期間において官刻・家刻・坊刻の三者の比較を手掛けることは断念し、坊刻の実態に関して更なる知見を深めることによって本研究計画の大きな目的である「明末清初の出版業界の実態を把握する」ことを部分的にでも達成しようという方針に切り替えた。また、本研究計画開始前の日本語論文を中国語に翻訳して海外の研究者に向けて発信したり、英語論文を日本語訳して国内向けに再発信したりもした。

方針転換をする前の2019年度のうちに、本研究計画開始前の2017年に神保町で開催された古典籍の入札会に出品された3点の明末の小説刊本について、上原究一「平成二十九年度東京古典会古典籍展覧会大入札会出品の章回小説稀覯本三種について」(『東方学』第138輯、2019年)で概要を紹介した。そのうち1点は1950年代に黄肅秋氏によって簡単な紹介がなされてから長く所在不明となっていた阿英旧蔵の熊雲濱覆世徳堂刊本『新刻出像官板大字西遊記』であり、この本の再発見によって、黄氏は当時参照可能だった資料に限られていたという事情から、刊行者に関して誤解をした上で紹介していたことが確かめられた。また、これと同版の本は既に3部が知られていたが(台北故宮博物院蔵本、日光輪王寺慈眼堂蔵本、天理大学附属天理図書館蔵本)、その3部よりも最も印刷が遅く、一部の版木が作り直したものに差し替えられていることも判明した。阿英旧蔵の『西遊記』については、2019年10月に北京で開かれた国際学会でも「阿英旧蔵熊雲濱覆世徳堂刊本《西游记》的再発見」(中国古代小説国際研討会、2019年)と題する中国語発表を行って紹介した。また、この年度には、明末清初に数多く出版された『三国志演義』の版本に関する最新の研究成果を一般向けの問題に落とし込んだ上原究一「黄蓋の武器と生死に見る『三国志演義』の形成・発展史」(『ユリイカ』51-9、2019年)を一般誌に寄稿したり、金沢文庫特別展「東京大学東洋文化研究所×金沢文庫 東洋学への誘い」や広島県立美術館特別展「入城400年記念 広島浅野家の至宝」の図録にそれぞれ明末清初の小説刊本に関する解説や解題を寄稿したりといったアウトリーチ活動にも力を注いだ。

2020年度には、上原究一「明末の商業出版における異姓書坊間の広域的連携の存在について」(『東方学』131、2016年)を中国語訳した上原究一「論明末商業出版界中異姓書坊間的跨地域合作關係之存在」(『國際漢學研究通訊』19・20、2020年)が公刊され、上原究一・荒木達雄「石渠閣補刻本『忠義水滸傳』の補刻の様相について」(『中国文学報』91、2018年)の成果の一部を8月にオンラインで開催された国際学会で「略述石渠閣補刻本《忠義水滸傳》的補刻情況」(第四届世界漢學論壇、2020)と題する中国語発表で発信した。

2021年度には、まずUehara Kyūichi, 「On the Position of Chiang-hsi in Commercial Publishing in the Late Ming and Early Ch'ing」(『ACTA ASIATICA』116、2019)を加筆修正の上で日本語訳した上原究一「明末清初の坊刻における江西の位置付けについて」(藤本幸夫編『書物・印刷・本屋 日中韓をめぐる本の文化史』所収、勉誠出版、2021年)が公刊された。また、以前に上原究一「虎林容与堂の小説・戯曲刊本とその覆刻本について」(『アジア遊学』218、2018年)でその小説・戯曲の出版活動について考察していた明末の杭州で活動した書坊容与堂について更なる考察を行い、2018年の拙稿の時点では容与堂の出版物は李卓吾の批評を銘打った小説・戯曲しか確認出来ていなかったものの、小説・戯曲以外の李卓吾の著作も出版していた可能性があることや、何の情報も得られていなかった主人に関する手掛かりについてをオンライン国際学会での中国語口頭発表上原究一「再談虎林容與堂の出版活動」(第20届中国古代小説戯曲文献暨数字化学術研討会、2021年)で報告した。また、容与堂が出版した『水滸傳』の挿画がそれ以前の小説刊本の挿画と比べて大幅に原文の描写に沿った表現をしていることをオンライン国内学会での口頭発表上原究一「『水滸傳』諸版本の挿画について 容与堂刊本を中心に」(中国古典小説研究会2021年度大会、2021年)で報告した。

2021年11月に神保町で開かれた古典籍の入札会に『新刻彙正十八國鬪寶傳』と題する明末の小説刊本が出品され、それを研究代表者が持っていた別の研究経費(令和元年度東京大学卓越研究員研究費)で落札して東京大学東洋文化研究所に収めることが出来た。伍子胥を主人公とするこの小説は従来存在自体が全く知られていなかったもので、明代の小説が新たに発見されるのは極めて珍しいことなので、2022年度はこの小説の研究に力を注いだ。年度内に中国語口頭発表上原究一「新發現明刊本小説《新刻彙正十八國鬪寶傳》初探」(第20届中国古代小説戯曲文献

暨数字化学術研究会、2021年)と日本語での一般向けのオンライン公開講座上原究一「東洋文化研究所新収図書『新刻彙正十八國鬪寶傳』をめぐって 新発見の明代小説」(第20回 東京大学東洋文化研究所公開講座「アジアの書」、2021年)を行って、これが確かに明代後期に建陽で出版されたものだと考えられることや、従来知られていた伍子胥の登場する元明清の通俗文藝作品との共通点や相違点、小松謙「『列國志傳』の成立と展開 『全像平話』と歴史書の結合体」(小松謙『中国歴史小説研究』所収、汲古書院、2001年)で明末の他の小説『列國志傳』の材料になったものとして想定されていた未知の通俗的な物語に相当するものである可能性が高いことなどについて紹介した。同書の全文の翻刻作業や研究論文の執筆も進めており、いずれも2022年度内の公刊は叶わなかったが、公刊に向けて準備中である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 上原 究一	4. 巻
2. 論文標題 明末清初の坊刻における江西の位置付けについて	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 藤本幸夫編『書物・印刷・本屋 日中韓をめぐる本の文化史』（勉誠出版）	6. 最初と最後の頁 768-785
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 上原 究一	4. 巻 19・20
2. 論文標題 論明末商業出版界中異姓書坊間的跨地域合作關係之存在（中国語）	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 國際漢學研究通訊	6. 最初と最後の頁 35-56
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 上原 究一	4. 巻 51-9
2. 論文標題 黄蓋の武器と生死に見る『三国志演義』の形成・発展史	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 ユリイカ	6. 最初と最後の頁 126-135
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 上原 究一	4. 巻 138
2. 論文標題 平成二十九年度東京古典会古典籍展観大入札会出品の章回小説稀観本三種について	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 東方学	6. 最初と最後の頁 59-71
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計7件（うち招待講演 2件 / うち国際学会 3件）

1. 発表者名 上原 究一
2. 発表標題 東洋文化研究所新収図書『新刻彙正十八國關寶傳』をめぐって 新発見の明代小説
3. 学会等名 第20回東京大学東洋文化研究所公開講座「アジアの書」（招待講演）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 上原 究一
2. 発表標題 新発見明刊本小説《新刻彙正十八國關寶傳》初探
3. 学会等名 第21届中国 古代小説戯曲文献暨数字化学術研討会（国際学会）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 上原 究一
2. 発表標題 再談虎林容與堂の出版活動（中国語）
3. 学会等名 2021年第二十届中国古代小説曲文献暨数字化学術研討会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 上原 究一
2. 発表標題 『水滸伝』諸版本の挿画について 容与堂刊本を中心に
3. 学会等名 中国古典小説研究会2021年度大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 上原 究一
2. 発表標題 略述石渠閣補刻本《忠義水滸傳》的 補刻情況 (中国語)
3. 学会等名 第四屆世界漢學論壇 (國際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 上原 究一
2. 発表標題 明代における『西遊記』の出版と流伝
3. 学会等名 神奈川県立金沢文庫 金沢文庫連続講座「東洋学への誘い」第5回 (招待講演)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 上原 究一
2. 発表標題 阿英旧藏熊雲濱覆世德堂刊本《西游記》的再発見 (中国語発表)
3. 学会等名 中国古代小説国際研討会 (2019) (國際学会)
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 神奈川県立金沢文庫編 (分担執筆)	4. 発行年 2019年
2. 出版社 神奈川県立金沢文庫	5. 総ページ数 120
3. 書名 (図録) 特別展 東京大学東洋文化研究所 × 金沢文庫 東洋学への誘い	

1. 著者名 広島県立美術館編（分担執筆）	4. 発行年 2019年
2. 出版社 広島県立美術館	5. 総ページ数 258
3. 書名 （図録）入城400年記念 広島浅野家の至宝	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------